

エベレストの山頂に立つ神奈川大山岳部遠征隊のメンバー。落合さんは登頂を断念した
—2009年5月



山岳遭難防ぐには

世界7大陸の最高峰を極めた神奈川大山岳部監督の落合正治さん(69)は、山の魅力とともにその恐ろしさも十二分に知る。「自然の中では誰も助けてはくれない。それはエベレストでも北アルプスでも、丹沢でも一緒」。夏山シーズンを前に、九死に一生を得てきたベテランクライマーは警鐘を鳴らす。

(須藤 望夢)

実力見詰め 目指せ頂

神大山岳部・落合監督

凍傷

「9年掛かってやっとここまで動かせたようになった。落合さんは、指の先が10本とも凍傷で失われた手をおもむろに広げる。

2009年5月18日。神大山岳部の登山隊は、世界最高峰エベレスト(標高8848m)の頂に達した。ただ、そこに隊長の姿はなかった。

前夜、日付が変わるか変わらないうかの頃合いにアタックを開始した。気温はマイナス30度。11人いた隊員は3人に減り、8400mの地点で隊長の落合さんの身にも異変が起きた。

標高8千メートルを超えると、酸素濃度は平地の3分の1まで低下する。生命維持に必要な酸素の量を確保できなくなる、「デスゾーン」と呼ばれる領域だ。

そのため、ボンベによる酸素供給が不可欠だが、当時ボンベは凍りついて機能せず、「無酸素」状態になっていた。血液が末端まで行き渡らない。全身が風に容赦なくたたきつけられ、体感ではマイナス60度ほどに感じたという。

指先に鈍い痛みを覚えながらも、指先を信じ、8600mまで歩を進めた。頂上まで残すは200m。だが、促すシェルパを制し、黙考した。グローブを外すと、凍傷で血の氣を失った両手はもう動くようだった。

「登ることはできたかもしれないが、帰っては来れないだろうな」と思った。チームの誰かが登頂すれば成功なわけだし、何より、生きていければまたチャンスはある。

落命

断念は間違いいではなかった。頂に旗を立てた神大の後輩も下山の途中に一時意識を失うほど、当時の

状況は壮絶だった。別のグループは登頂を遂げた直後、3人が命を落としたと聞いた。遺体を降ろそうにも、降ろすことは困難を極める。今も故郷の土で眠ることができない人たちがいる。

「8千メートルから先は死の領域。とりわけ9千メートル近いエベレストは別格の山。思い浮かべるのは、自らの半分ほどの年齢で逝った登山家の姿だ。

5月下旬、エベレスト登頂を目指した栗城史多さん(35)が、下山中に亡くなった。最も困難なルートの一つに挙げられる南西壁に挑んだが、断念し引き返している際に滑落したとみられる。



「エベレストは別格」と魅力と恐ろしさを語る落合さん
—横浜市中区

警鐘

エベレストの体験は、必ずしも興味の元として片付けてはならない。落合さんは、山の難易度や

登山者の世代を問わず、力量を過信することが危険を招くと力説する。

「体力も判断力も自覚するよりワンランク下げた山を選ばないと、思わぬ事故や道迷いに遭う。行程も日があるうちに下山できるような余裕を持って立てることが何より大事」と話す。特に焦りを生む下山時は注意が必要と呼び掛ける。

県警によると、県内で昨年1年間に発生した山岳遭難事故は123件、遭難者は149人でともに過去最多を更新した。うち6人が帰らぬ人となった。

山岳遭難は全国的にも後を絶たない。警察庁のまとめによると、16年は2495件、2020年と、1961年以降最多だった前年に次いでいずれも過去2番目に多かった。今年に入っても春山登山で新潟県の親子が遭難し、命を落とす痛ましい事故が起きている。

「登山届の提出は大前提。単独行は極力避けて仲間と安全に楽しく登り、力量を磨いてほしい。自分に見合ったところで調整していけば少しずつ力量は上がっていくし、判断力も備わっていく」

落合さんは不慮の事故が相次いでいる現状を憂慮するとともに、こう付け加える。「持てる全てのものを使って得たものは大切な宝物。人の心を魅了する全てのものは、たやすく手に入るものではないのだから」

だからこそ、人はときに常軌を逸した苦難に遭うのを知りつつ、山に引かれ、向かう。古希を控えてもお、落合さんは再びエベレストに登る日を夢見る。

「8千メートルの山々を眼下に見た。あの美しさをもう一度、今度は頂上から眺めてみたい」まぶたの裏には最終キャンプ地で眺めた朝焼けが焼き付いている。